

5 適切な手法での生物生息環境の改善等による生物多様性の維持増進

京都：ササの刈り取りによる林床の植物種数の増加と科学的な定量

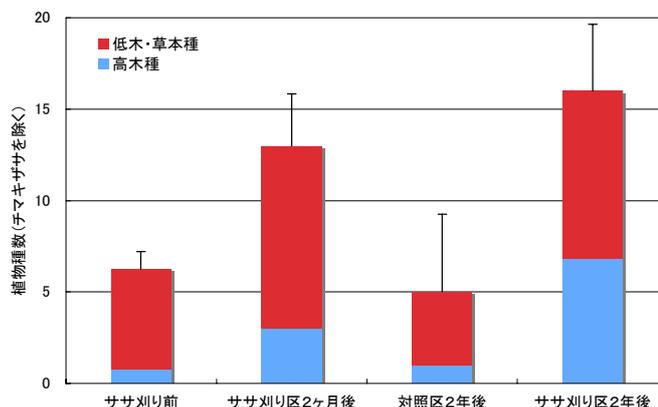
宮津地区では、この地域の伝統的民家であるササ葺き民家の再生活動の一環として、かつてカヤ場として利用されていた里山においてチマキザサの刈り取りが行われた。この際、ササの刈り取りを行わない対照区を設定し、ササの刈り取りによる林床の植生変化をモニタリングした。

この結果、ササ刈り区では刈り取り直後から林床植物の種数が明白に増加し、2年後にはさらに種数が増加する傾向が見られた。

とくに、時間の経過に伴って高木性の植物種の増加が著しかった。とくに、シデ類、モミジ類、クリ、ウワミズザクラなどの新規発生が盛んであった。実や花を楽しめる植物としてはツルリンドウ、ナガバナモミジイチゴ、タチツボスミレ、ミツバアケビなどが新たに加わった。一方、ササ刈りを行わなかった対照区では、2年経過後も林床植物種数の増加は見られず、高木性植物実生の割合も低いままであった。

ササの刈り取り間隔は、地域住民に対する聞き取り調査によればおおむね5年程度とされている。ササの刈り取りを継続して行うことにより、他の草本型林床に近い種数が林床に維持され、多様な草花を楽しめる環境に推移していくとともに、二次林の更新のための条件も整えられていくものと考えられる。

また、農地周辺では、ため池や休耕田になって間もない水田で草本性の希少種が確認され、地域住民による耕作の持続が多様な草本の生息環境を維持していると考えられる。



上世屋地区における希少種の分布状況

ナガエミクリは広い放棄耕作地の山裾にある小さなため池に生育しており、生育状態は良好で結実個体も見られた。イヌミゾハコベは休耕1年目とみられる水田で見られた。このように、里地に草本性の希少種が分布している。